
モンスターハンター～蒼き英雄～

HEAT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター〜蒼き英雄〜

【Nコード】

N5192X

【作者名】

HEAT

【あらすじ】

タイトルを変更しました。

事故に遭い死んでしまった高校生の飛島勇樹。しかし、神様のおかげで、異世界で生き返ることになった。

その世界は・・・モンハン！？

ハンターとなった勇樹と仲間が織り成すモンハンコラボ小説！

なお、後々他ゲームとのコラボも予定しています。

「プロローグ」俺・・・死んじゃった・・・（前書き）

始めまして！HEATです！記念すべき第1話！ゆっくりと見てく
ださい！
ではどーぞ！

「プロローグ」俺……死んじゃった……

ここは日本の愛知県豊橋市のある所。ここの地域はほかと比べておかしなところがある。

ある日の夕方。青年は部活を終えて帰路についていた。彼の名前は飛島勇樹。地元の高校・蒼龍館高校の2年生である。勇樹の髪の毛の色は日本人とはかけ離れていて、青色なのである。

勇樹だけではなく、ここの地域の人はオレンジだったり、緑だったり、赤だったり、ほかと比べて色が異質なのである。おかしい所と
いうのはそう言うところである。

話を戻そう。勇樹は歩いて歸路についていた。

飛「今日も疲れた」

勇樹は疲れているようだ。

飛「んじゃ。狩りますか！」

そういつて勇樹はバッグからPSPを取って、ゲームをやり始めた。飛「やっぱモンハンはいいなあ。ふっ、それっ！」

勇樹はやっているのはモンスターハンターポータブル3rd。最近発売されたモンハンの最新作で、学校も大半がやっているほどである。

飛「それっ。はっ！」

勇樹は夢中になっている。そして前方には横断歩道が見えてきた。しかし運悪く手前で歩道信号が青から赤へ変わってしまった。だけど勇樹はゲームに夢中になっていて、気付いていない。

そのまま横断歩道に入ったその時。

パ
パ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
-
-
-
-
-
-

飛「えっ？うわああああ——！」

ドツ
カア
アア
アア
アア
アア
アア
ー
ン！！！！！！！！

勇樹は走ってきた車にはねられてしまった。勇樹はそこから数m跳ね飛ばされ、路面に倒れた。

飛（あゝ車にはねられてしまった・・・自業自得とはいえ、もっと生きたかったなあゝ）

次第に辺りが黒くなってきた、薄れ行く意識の中、勇樹はそう思った。すると。

『聞こえるか・・・哀れな者よ。』

はつきりとそう聞こえた。気付けば辺りは真っ白だ。その声は続ける。

『哀れな者よ。もっと生きたいか。』

飛（も、もちろん！でもどうやって？）

尋ねる勇樹。

『君をここから違う世界に飛ばすのだ』

声はそう答えた。

飛（そ、そんなことが出来るのかい！？）

驚く勇樹。

『さあ、どうする。死ぬよりましだと思うが。』

飛（・・・分かった。俺をその世界に飛ばしてくれ！どんな世界になってもいい！死ぬよりましだ！）

勇樹は決意交じりにOKの返事を出した。

『分かった。ではこれを受け取れ。』

そういつてその声は勇樹に1つの双剣を渡した。

飛（これは？）

『これはこれから行く世界で役に立つであろう。それとも一つ・・・』

飛（何？）

『死ぬなよ。』

その声は心を込めて、言った。

飛（分かった。絶対ッッッ対死なねえ。いろいろありがとう。えっ（と？））

『ああ。名乗らなくてすまない。私は神だ。』

声もとい神はそう言った。

飛（え、ええええ！！神様だったの！）

勇樹は驚く。

神『そうだ。すまない。最初に名乗らなくて。』

飛（うん。いいよ。そっか、神だったのか。ありがとう神様！行ってくるよ！）

神『ああ。気を行けて行って来い！』

神が言うつ。勇樹の目の前は真っ白になった。同時に勇樹の意識がどこかへ行った。

かくして勇樹は異世界に旅立ったのである。

TO BE CONTINUED・・・

「プロローグ」俺・・・死んじゃった・・・（後書き）

異世界にとびだった勇樹。その先に待ち受けるものとは・・・
次回あの人気モンスターが出ます！

「第1話」飛ばされた世界は・・・ユクモ村！？（前書き）

2話目です。勇樹が飛ばされたところが分かります。
題名で分かるが。
ではドーぞー！！

「第1話」 飛ばされた世界は・・・ユクモ村！？

飛
「
う
・
・
・
ん
・
・
」

勇樹はふかふかした感触で目を覚ました。勇樹はベットの上で寝ていた。

飛「あれ？ここは何処だ？」

勇樹は辺りを見渡して呟いた。
見たところ木造建てだ。

しかし見るからにして新しいところもあった。勇樹の家ではないことは分かっていった。

飛「あ、そっか。異世界に來たんだっけ。ってあれ！？服がない！」
 思い出すように独り言を喋っていた勇樹は服を着ていないことに気が付いた。代わりにインナーと呼ばれるいわば下着みたいなものを着ていた。

飛「これといい、家といい、何処だここは？」

悩む勇樹。すると……

「あつ！気が付いたかニヤ！」

聞きなれた声が聞こえた。

ゲームの上でが……えつつと思った勇樹は声が聞こえたほうを向いた。

獣人族モンスター・アイルーがいた。

飛「えつ・ええええええええええ」

驚きのあまり声を荒げる勇樹。

ア「？」

その行動に首をかしげるアイルー。

ア「まあいいにや。それより最初見たときは驚いたニヤ。村の入口で倒れていたあんたを見たときは。」

飛「僕が・倒れていた。」

呟く勇樹。まだ衝撃があるようだ。

ア「そうだニヤ。アンタ立派な双剣を持っているのに今の状態で倒れていたニヤ。何かしでかしたのかニヤ？」

飛「うつ、うつん・・ごめん。思い出せない（汗）」

異世界から来たなんて言えない勇樹はそう言った。

アイルーも納得したようで、

ア「そうかニヤ。分かったニヤ。」と言った。

飛「ところでここは何処？」

勇樹は前から気になっていたことをアイルーに尋ねた。アイルーは、ア「ここかニヤ？ここはユクモ村ニヤ。」

ありえないことを言った。

飛「ゆ、ユクモ村あ！？」

勇樹は驚いてまた叫んだ。

驚くのも無理はない。ユクモ村は『モンハン』の世界の村だから。どうやら勇樹はモンハンの世界に飛ばされたようだ。

飛（俺・・モンハンの世界に飛ばされたのか・・・）

驚きを隠しきれない勇樹。するとアイルーは何かを思い出したらしく。

ア「そういえば、村長が『目を覚ましたら、私のところへ来てくだ
さい。』って言ってたニヤ。」

飛「村長が・・・」

ア「そうだニヤ。さっ、村長の所へ行くのニヤ。考えるのはその後
ニヤ。僕が案内するニヤ。」

その言葉で、勇樹は悩む？事をやめた。

飛「分かった。ありがとう。ところで君名前は？」

ア「僕かニヤ？僕の名前はジローだニヤ。」

飛「ジローか。いい名前だね。僕はユウキ。よろしく。」勇樹はゲ
ーム内で使っていた名前を言った。

ジ「よろしくニヤ。じゃっ、行くニヤ。」

ユ「ああ。」

ユウキはジローとともに村長の所へ向かった。

T O B E C O N T I N E D . . .

「第1話」飛ばされた世界は・・・ユクモ村！？（後書き）

2話目終わりました・・・疲れた。

次回、ユウキは村長に会いに行きます。

後次回から、勇樹の名前表示がカタカナに変わります。

「第2話」ハンターの勧誘！？（前書き）

6日ぶりです。ではドーぞ。

「第2話」ハンターの勧誘！?

ユウキはジローの案内で村長のところへ言った。といってもユウキがいた家の隣だが。

ジ「村長。連れてきたニヤ。」

ユウキはジローが村長と呼んだ女の人を見た。肌は白く、きれいな人だった。それに耳が長いのが特徴だ。

村「まあ。目を覚ましたのですね。私はユクモ村の村長です。あなたの名前は？」

ユ「僕の名前はユウキです。よろしく願いします。」

村「ユウキさんですか。いい名前ですね。」と褒められたので、

ユ「あ、ありがとうございます。」照れくさそうにお礼を言った。

ユ「あつ、あのーそれでお話というのは？」

村「ええ。実はあなたにこの村のハンターになってほしいんです。」

ユ「ハンター・・・ですか。」

村「はい。いい双剣を持っていますし、実力もそこそあると見ました。どうですか？」村長はそう言った。

ユウキは暫く考えた。そして、

ユ「いいですよ。」OKの返事を出した。

村「なつてくれるのですか？ありがとうございます！早速ハンター登録しておきます。」

ユ「分かりました。（喜んでただ何でだろ？）」

ユウキは村長の喜びように疑問を抱いた。

すると村長は

村「ところで防具はないんですか？」

気にしていたことを言われ、ショックを受けた。

ユ「実はないんですう・・・」

消え入りそうな声でユウキは言った。

村「そうですか・・・ではこれをあげます。」

と言って村長はユウキにクモシリーズを渡した。

ユ「えっ・・・いいんですか？」ユウキは驚きながら言った。

村長はにつこりと笑顔で、

村「ええ！いいですよ！」と答えた。

ユウキはなきそうになりながらも、

ユ「ありがとうございます！！！」とお礼を言った。

村長は笑いながら「どういたしまして」と言った。

村「では、明日からクエストが受けられます。ハンターとしてがんばってください。」

ユ「分かりました。明日からか・・・やってやるぜ！！！」と意気込むユウキだった。

その横で、

ジ「僕の出番は・・・」

ジローは嘆いたが、誰にも聞こえない。

TO BE CONTINUED・・・

「第2話」ハンターの勧誘！？（後書き）

いやゝジロー忘れてた。あっはっは。ジ「笑い事じゃないニヤ！」
す、すいません・・・

はれてハンターとなったユウキ。がんばれ！（おい。）

後・・・誰かコメントをお~~~~~

「第3話」ユウキの憂鬱（前書き）

なかなかアイデアが浮かばなくて、2・3日経ってしまいました。
ではどうぞ。

「第3話」ユウキの憂鬱

村長との話を終え、ユウキは皆に挨拶をするため、商店街のほうへ寄り道をした。

商店街には、生活用品や狩りに必要なものが売られている店や、武器・防具を素材を使って、強化・生産する鍛冶屋やオトモ武具が作れるオトモ武具屋などいろいろな店が並んでいた。

ユウキは村人たちに自分を知ってもらうため、店の人や者を買いに來ていた人達に挨拶をしていた。

皆優しく、ユウキが挨拶をすると「がんばれよ」「応援しているからな。」など、期待の声をたくさん聞いた。

一通り挨拶をしたユウキは自分の家へと足を進めた。

ちなみに家は最初にユウキが寝ていた家で、あの家は誰も住んでいないのでご自由に使ってもいいですよと村長が言っていたのでユウキはこの家を使うことにした。

そして家に着き、改めて家を見る。

ユ「でかいな・・・」

ユウキはそう呟いた。

村長によればこの家は地下にも部屋があると言っていた。

1人で住むには広すぎる。

ユ「あいつら連れてこれたらな・・・」

ユウキは悲しそうにそう呟いた。

ユウキには3人の幼馴染がいた。

しかし、あつちの世界で一度死んでしまつて、顔が見ることが出来なくなつてしまった。

ユ「こつちの世界に連れて来れないのかな？・・・そんなこと出来たらいいのにな。」

ユウキはそう呟いた。

しかし、後にこの思いが現実となる。

ユウキは複雑な気分で家に入ると、ジローがいすにちょこんと座っていた。

ユ「ただいま。」

ジ「お帰りなさいニヤ。」

ジローは勇気に気付くないや、ユウキに駆け寄つていった。

ジ「ユウキさん。あの話、考えてくれましたかニヤ？」

ジローはユウキにそう言った。

実はジローはユウキが挨拶へ行く前にユウキにあることを言っていた。

ユ「ああ。いいよ。今日からお前は俺のオトモだ。よろしく。」

ユウキはそうジローに言った。

どうやらジローはユウキにオトモの話をしていた。

その話をユウキはOKといった。

ジ「ありがとうニヤ」よろしくニヤ！ご主人！」

ジローはユウキに抱きついた。

ユ（なんか、順調にことが進んでいるような気がするが・・・とにかくサイコーな日だったな」けど、明日から狩りの日々が始まる。引き締めなきや！）

ユウキは心の中でそう思った。

そんな雰囲気の中、夜を迎えた。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
E
D
.
.
.

「第3話」ユウキの憂鬱（後書き）

べただよ。書いてるこっちもいやになってくる。

だけど書いた以上、最後まで書くのが鉄則。中途半端なことはやってはいけないこと。

それまでに、ストーリー性ももっとよくしていきたいです。

「第4話」正体がばれるとき（前書き）

ユウキの正体がばれます。ではどうぞ。

「第4話」正体がばれるとき

その日の夜。

ユウキはジローと喋っていた。

ユ「あゝ明日が待ちきれねー早くなっしてくれねーかな？」

ジローはユウキの言葉に呆れて注意した。

ジ「ご主人。興奮していては眠れないニヤ。それが明日に響いては元も子もないニヤ。」

ジローの言葉にユウキは「そうだな」と納得していた。

ユ「それじゃあ、なんか喋るか。」

ユウキは提案してきた。

ジ「それはいいニヤ！・・・でも。」

ジローはそれに賛成したが、すぐに困った顔になった。

ジ「どんなことを話せば言いのニヤ？」

ユ「それは・・・うーん・・・」

ユウキの考えた。すると横から声をかけられた。

「私はいろいろあるよ。」

ユ「そ、村長！？」

ビックリしたユウキは横を見た。村長が居た。

村「何もないなら、私、聞きたいことがあるの。いい？」

ユ「いいですよ・・・」

ユウキはそう言うと、村長はありえないことを聞かれた。

村「あなたは違う世界の人間？」

ユウキはビックリした。ジローもビックリしていた。

ユ「何故そんなことを。」

村「いいから答えて。」

村長に気押されて、ユウキは決断し、

ユ「誰にも言わないならいいです。」
といった。

ユ「オレは、異界人です。」

ユウキはそう言った。

ジ「ご、ご主人が・・・」

ジローはビックリしていた。村長はいたって冷静だった。

村「そうなの・・・てことは、あなたが「あの人」が言っていた異界の狩人なのね。」

村長の言葉に2人とも頭に？マークがついた。

ユウキには心当たりがあった。

ユ「それってもしかして、神様？」

村「うん。そうだよ。」

ジ「ニヤ！？ニヤんだって～～」

ジローはさらにビックリしていた。ユウキも驚いていた。

ユ「神とどういう関係が。」

ユウキはそう言うと、村長は語りだした。

昔、村長はハンターをしていた。当時彼女は周りから評判だったらしいのだが、それを快く思わなかった人たちが、彼女の寝込みを襲い、意識不明の重体になったのだ。強姦される前に人に見つかり、襲った人はその後処刑された。

しかし、村長は依然意識不明だった。その時意識不明から助けくれたのが神だった。

ユ「そうだったんですか・・・その後の関係は？」

ユウキは聞いた。

村「続いているよ。あなたが来たとき、神くんと喋っていたときに神君が言っていたの。「今日、異界の狩人がやってくる」って。」

ジ「そうだったのかニヤ・・・」

ジローは呟いた。

ジ「でも、ご主人はご主人ニヤ。ご主人が誰であろうと、僕は、ご主人についていくニヤ。」

ユ「ジロー・・・」

ユウキは泣きそうになった。すると村長は突然立ち上がった。

村「さて、まだまだ聞きたいこともあるけど、今日は遅いし明日聞くわね。後、このことは絶対誰にも言わないでね。じゃ、またね。」

村長はそういつて、帰って行った。

ジ「僕も興味があるニヤ。いっぱいご主人のこと聴かせてほしいのニヤ。それじゃ、僕も寝るニヤ。」

ジローは自分の寝室に行った。

ユウキも自分の寝室へ行き、寝た。

- - -そして、朝を迎えた。

T O B E C O N T I N E D . . .

「第4話」正体がばれるとき（後書き）

正体をしよっぱなからばらしてしまいました。
次回から、「初めての狩り」編が始まります。

「初めての狩り編・第5話」ユウキの剣（前書き）

初めての狩り編が始まります！今回は、ユウキの剣の紹介を中心にしたいと思います。

本格的に始まるのは次回からです。すいません。
では5話めどーぞ！

「初めての狩り編・第5話」ユウキの剣

ユ「ふわあ~~~~よく寝た」

朝、ユウキは爽快な気分で起きた。

ユ「あれ？」

ユウキはリビングを見て、不思議に思った。誰もいないのだ。

ユ「早く起きちゃったのかな？今、もう寝る気分じゃないし・・・
どーすっかな・・・」

ユウキは悩んだ。

ユ「・・・そういや、神様からもらった剣じっくりと見てなかったな・・・昨日も喋ったりして、見てなかったしな・・・見てみるか」

そういつて、端っこにおいてあるアイテムボックスから、剣を取り出した。

ちなみに、昨日もらったユクモ装備も通常ここに入れてある。

ユウキはいすに座って、剣をじっくりと見た。

まるで、刀のような剣だった。

刀身の色は深海のごとく、真っ青だった。グリップ部分は、黒色だった。

ユ「すごいきれいだな・・・俺の髪の毛と同じ色か・・・」

ユウキは感想を述べていた。

ユ「この剣の名前は？」

ユウキは、剣に名前が書かれていないか剣全体を見た。
名前は刀身の根元部分にかかれてあった。

『青龍刀』

それがこの剣の名前だった。

ユ「かつこいいなあ・・・本当に刀のようだ。名前もそれっぽい。」

ユウキはそう呟いた。

ユ「それじゃあ、この剣の属性は？」

ユウキが調べようとしたとき、

ジ「んにゃあゝよく寝たニヤゝ。」

ジローが起きてきた。

ユ「ジローおはよう。」

ユウキは、作業の手を止めてジローに挨拶をした。

ジ「おはようニヤご主人。早いですニヤ？もしかして待ちきれなかったとか？」

ユ「はは。そうだね。待ちきれなくて早起きしちゃったよ。」

ユウキはそう言つと、ジローは笑った。

ジ「ご主人らしいニヤ。時間もいらいだし、準備が出来次第行きますかニヤ。」

ユ「ああ。そうだね。」

そついつて2人は準備し始めた。

――暫くして、2人の準備が出来た。

ユウキはユクモ装備を見にまとい、背中には、双剣『青龍刀』を携えていた。

一方のジローは、どんぐり装備というどんぐり素材で作った防具に、猫の手のような武器、『ニヤンニヤン棒』を携えていた。

ユ「準備も出来たし、行きますか！ジロー！」

ジ「ンニヤ！行きますかニヤ！」

ユ「よっしゃあー！初陣じゃあー！！！」

ジ「ニヤああああー！！！」

2人は叫びながら、家を出て行つた。

TO BE CONTINUED……

「初めての狩り編・第5話」ユウキの剣（後書き）

集会所すら入ってません。ごめんなさい（泣）

今回はユウキの剣について書きました。

次回、受注をします。そして、出ないはずの龍の情報が？
期待してください！

「初めての狩り編・第6話」クエスト受注（前書き）

一つお知らせがあります。

この初めての狩り編はモンハン3（トライ）Gに先駆けられた話になってしまいかもれません。

しかし、あくまで3rdを基にしていますので、トライGは無関係です。

長くてすいません。6話めどーぞ！！！

「初めての狩り編・第6話」クエスト受注

ユ「うわあ・・・きれいだなあ・・・」

ユウキは集会所に入ったとき、そう呟いた。

中は広く、数人の村人が料理を食べていた。

ユ「クエストカウンターは・・・あそこか。」

ユウキたちは、クエストカウンターのところへ行った。

クエストカウンターには、2人の受付嬢が居た。

左にはピンクの服を着た人が、右には緑っぽい服を着た人がいた。

ジ「最初はピンクのほうニヤ。ご主人。」

横でジローがユウキにささやいた。

それを聞いてユウキは左のほうへ行つて、話しかけた。

ユ「すいません。今日からハンターになりました、ユウキです。僕に合ったクエストはないですか？」

ユウキがそう言うと、受付嬢が笑顔になって答えた。

嬢「あなたがユウキさんですか！私は下位のクエスト受付をしています、ミキです、ミキで

す！よろしくお願いします！」

ユキが自己紹介をすると、隣の受付嬢も自己紹介した。

嬢「私は上位のクエスト受付をしています、リナです。ユキの姉です。よろしくお願いします。」

ユ「こちらこそよろしく。」

ユウキはもう一回挨拶をした。

ミ「では紹介が終わったところで・・・あなたはH R 1ですから・・・

・これですね！」

ミキはそういつて、後ろの柵から、分厚いファイルのようなものを取り出し、ユウキに渡した。

ユ「へえ〜どれどれ・・・どれにしようかな・・・」

ジ「まずは軽く、ドスジャギイでも行きますかニヤ？クエストもありますし、場所も溪流で、戦いやすいと思うのだがニヤ。」

悩んでいたユウキに、ジローがそう提案した。

ミ「それはいいかもしれませんが！まずは小手調べみたいな。」

リ「いいかもね。」

ジローの提案に姉妹もそう言った。

ユ「よしっ。これで行こう。お願いします。」

ミ「分かりました。では行つてらっしゃい！！」

ユウキはミキにクエストを提出すると、ミキは笑顔でそう言った。

ユ「準備はいいな。ジロー。」

ジ「OKニヤご主人！」

2人は行く前に忘れ物がないか確かめ合った。

ユ「じゃあ、行くぞ！」

ジ「ニヤア〜！」

2人は勢いよく、集会所内の門を出て行った。

ユウキの初クエストが、始まった。

・・・一方、ここはユウキの初クエスト場所でもある溪流のあるエリア。

ユウキの獲物であるドスジャギイは・・・

全体が青く染まった龍と対峙していた。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
E
D
.
.
.

「初めての狩り編・第6話」クエスト受注（後書き）

いよいよ始まったユウキの初狩り。

最後に出た青いからだの龍については、あえて言いません。
みんなしっていると思いますし。

一つだけ言っと・・・火竜です。それは
じかい。ユウキがそいつと、対峙します。

「初めての狩り編・第7話」異変の溪流・・・対峙する蒼い龍（前書き）

やっと更新できました。

時間が無くて・・・すみません。

この回はちよつと残酷表現あります。
ではドーぞー！！

「初めての狩り編・第7話」異変の溪流・・・対峙する蒼い龍

ユ「うわゝすごい!!」

溪流に着いたとき、ユウキは感想を述べた。

集会所を出発したユウキ達は、船・・・じゃなくって、歩いて溪流のB Cの所まで行った。
ベースキャンプ

村とはそんなに離れていなくて、歩いて1時間ちよつとで着いた。

ジ「ご主人。早く準備をしていくニヤ!」

ユ「うん。そうだな。」

ユウキはジローに注意をされて、少し疲れていたが、準備に取り掛かった。

ユ「それにしても、自然がすごいね!! 空気もおいしい。」

準備を終え、ユウキはB Cから見える景色を座って見ながらジローに言った。

ジ「そうかニヤ? 自然なら、ユクモ村も負けていないですニヤ。」

ジローは不思議そうに答えた。

ジ「・・・ユウキさんのいた国の自然はどうだったんですかニヤ?」

ユ「ん? 自然? 最悪だったよ。むしろ危険な状態だったよ。」

ジローの質問にユウキはそう答えた。

ジ「そ、そうだったんですかニヤ・・・」

ユ「うん。森林伐採や、公害やらなんやらで環境が悪くなっちゃっ

てね・・・俺の話はここまで。」

そういつてユウキは立ち上がった言った。

ユ「行くぞおおおお！！！」

ジ「はいニヤ！」

ジローも続き、2人はBCを後にした。

ユ「な、何だこの雰囲気は・・・」

意気揚々とBCを後にしたが、エリア1に入ってユウキは異常な雰囲気にはビックリした。

ジ「モンスターもいないニヤ・・・」

ジローもビックリしながら言った。

エリア1には、ガーグアやケルビなどと言った温厚なモンスターがいたが、そのモンスターもいない。

それに先ほどから空気がピリピリしている。

ユ「何かがおかしい・・・とりあえず探索して見よう。オレから離れるなよ。」

ジ「は、はいニヤ・・・」

ユウキの提案にジローはうなずいた。

ユウキたちは原因を探るべく、1周りエリアを見ることにした。

——数分後。

ユ「うん・・・何も見つからないなあ・・・」

1↓4↓7↓9↓8とエリアを見たが、何もみつからなかった。

ユ「ジローそっちはどうだ。」

ジ「何も・・・あれ？」

ジローが何かを見つけたようだ。

ジ「ご、ご主人！！」

ユ「ど、どうした！」

ジローが大声で呼んだので、ユウキはジローの元に駆け寄った。

ユ「うおっ！？・・・これは・・・血！？」

それを見たユウキはビックリした。

そこにあつたものは、小さなたまりになつた血だった。

ジ「ご主人・・・それに。」

ユ「ああ。空気がかなりピリピリしてきた。それに」

ユウキが言おうとしたとき、

グガアアアアアアア！！！！！！

かなり大きい声がエリア6のほうから聞こえてきた。

ユ「うおっ！？」

ジ「ニヤアア！？」

2人は耳を伏せる。

ユ「ジロー！行くぞ！」

声が聞こえなくなつた後、ユウキがそう言った。

ジ「は、はいニヤ！」

ジローが言い、2人は次のエリア6へ入った。

ユ「えっ！？」

ユウキは入ったとき、信じられない光景を目にする。

ジ「ど、ドスジャギイが・・・」

ジローが青ざめながら言った。

そこには、無惨な姿になったトスジャギと・・・

蒼い火龍がいた。

T O B E C O N T I N E D . . .

「初めての狩り編・第7話」異変の溪流・・・対峙する蒼い龍（後書き）

伸ばしてすみません。

次回、蒼い龍と戦います。

「初めての狩り編・第8話」圧倒的敗北・・・（前書き）

11日によやく初感想が着ました。その中の『ハードルが高すぎる』というのに、納得してしまいました。

さすがにやりすぎてしまいました。

これから、ぜひとも見てください。

初めての狩り編もあと1話で終わります。ではどうぞ！

「初めての狩り編・第8話」圧倒的敗北・・・

ここは——ユウキの家。

その家のベットには、全身が包帯で巻かれた痛々しい姿の男が寝込んでいた。

「くっ・・・いてえ・・・」

ユウキだった。

あの後、ジローと一緒に蒼い竜に挑んだが、返り討ちに遭ってしまった。

ユ「あのまま素直に引いていれば、こんなことには・・・くそっ！
！」

ユウキは、悔しさのあまり、ベットに拳を叩いた。

ユ「くっ！！・・・痛い。」

叩いたときに、全身に痛みが走った。

ユウキはそのまま寝込んでしまった。

く回想く

ユ「えっ・・・うそ。」

ユウキは目の前の青い竜を見て、驚いた。

それはこの世界では、出ないモンスターだったから。

ユ「なん」

ユウキは言おうとしたときに、蒼い竜はユウキ達に向かって火球を放った。

ユ「くっ！」

ジ「にゃあああー！」

ユウキ達は、慌ててよける。

ジ「ご主人！」

ジローがユウキのところに来た。

ジ「あれは・・・なんですニャ？」

ユ「あれは・・・リオレウスだ・・・」

ユウキは驚きながら、ジローの問いに答えた。

ユ「それも・・・リオレウスの亜種だ。」

ジ「にゃー!？」

ジローはそれに驚いた。

ジ「リオレウス亜種なんて聞いたことないのニャ！」

ユ「ああ・・・何でここに。」

2人は話しているうちに、リオレウス亜種が突進してきた。

2人はそれをよける。

そしてよけた後、すぐさまユウキは立ち上がり剣を取り出して、リオレウス亜種に立ち向かっていった。

ユ「うおおおおおおおー!!!」

勢いそのままに、突き進んでいく。

しかし――

ユ「はあはあはあ・・・」

あまりに、フルスピードで走ったがために疲れて、息切れをしてしまった。

徐々にスピードが落ち、遂にはその場でへ垂れ込んでしまった。
突進動作を終えたりオレウス亜種は、ユウキのほうに向きユウキの
ほうに向けて、火球を放った。
ユウキも動けなかった。

ジ「ご主人！！！」

ジローが食い止めようと走ったが、間に合わず。

ユ「グワアアアアア！！！！」

ユウキに命中してしまった。

ジ「ご主人！！！！ご主人！！！！」

ジローが泣きながら、必死でユウキを呼ぶ。

当たった後のユウキの姿は悲惨だった。

服は焼けただれ、全身にやけどを負っていた。

かなりやばい状態である。

ジ「ご主人！！！」

ジローが叫んだ。すると。

ユ「う・・・は・・・」

なんとユウキが立ち上がった。

ユ（早く戻らないと・・・ジローもオレも・・・死んでしまう。）

ユウキはその時そう思った。

そして、

ジ「ニヤ！？」

ジローを持ち上げ、

ジ「！！！！！！！！」

エリア外に逃れるため、走り出した。

リ亜「がアアああ！！！！！」

リオレウス亜種は逃がさないとばかりに、突進してきた。

必死で逃げるユウキ。リオ亜種との距離も縮まっていくな。
それでも必死で走るユウキ。そして――

ユ「ぐはっ！」

ジ「にゃ！」

二人は無事に安全なエリアへ退避することが出来た。

安心と全身の痛みからか。

ユ「うつ・・・」

ユウキは倒れてしまった。

ジ「ごしゅじん！！！！？」

ジローの声が聞こえてきたが、反応することが出来なかった。

そして、ユウキの初狩りは、失敗という形で終わってしまった。

その後のことはユウキは何も知らない。

（回想終了）

寝込んでいるユウキのところに、誰かがやってきた。

TO BE CONTINUED...

「初めての狩り編・第8話」圧倒的敗北・・・（後書き）

こんな形で、ねじ込みました。

これでいいのかな？

次回、初めての狩り編最終回です。

「初めての狩り編最終回・第9話」ユウキの決意（前書き）

更新がかなり遅くなりました。 すいませんでした！

初めての狩り編もこれで最終回・・・これを書いてるうちに自分は非常識だなあと思う話でした。

あと少しで、トライGが発売されますが、皆さんは買いますか？
それではどうぞ！

「初めての狩り編最終回・第9話」ユウキの決意

「ご主人・・・」

家の中に入ってきたのはジローと、

「ユウキ君・・・」

村長だった。

ユ「2人ともどうしたんですか？」

ユウキは2人の悲しい顔を見て、2人の聞いた。

ジ「ごめんなさいニヤ！オトモである僕が軽くあんなことを言わなければこんなことには。」

ユ「ジロー・・・」

ジローが謝ったので、ユウキは驚いた。

村「私も、勧誘をしなければこんなことには・・・ごめんなさい・・・」

村長も謝ったので、ユウキは言葉を失ってしまった。

ユ「いいんです。僕が技術が足りなかったんです。それに、判断力が足りなかったんです。まあ、異世界の人だからそんなの持つていませんが・・・」

村「ユウキ君・・・」

ユ「でも僕はやめません。もっともつと強くなって、あの龍を倒して見せます！」

ジ「ご主人・・・」

ユ「だからジロー。一緒にがんばっていつ。」

ユウキの言葉にジローは大きな声で、

「はいニヤ！」

と答えた。

しかし村長はまだ落ち込んでいて
村「本当にそれでいいの？」
といった。

ユ「はい。この村には、ハンターがいないんですよ？」
村「どうしてそれを・・・」

ユ「だからオレががんばっていきます！お願いします！」

村「本当にそれでいいの？」

ユウキの決意に、村長はもう一度聞いた。

ユ「はい！」

ユウキはそう言った。

村長は普段の顔に戻った。

村「分かったわ。でも先にその怪我治さないとな・・・」

ユ「うつ・・・そうですね・・・治して、また狩りに行くぞ！」

ユウキの声が辺りに響いた。

2人から叱られたのは言うまでも無い。

TO BE CONTINUED・・・

「初めての狩り編最終回・第9話」ユウキの決意（後書き）

初めての狩り編これで終了です。

引き続き更新はしますので、安心してください。

1話書いた後、また長編を書いていきたいと思えます。
変な終わり方ですいません。

「第10話」ユクモ農場で特訓だぜ！（前書き）

かなり遅くなつてすいません。本当にごめんなさい！！！！

遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。

半休止状態の間にトライGが発売されましたが、皆さんは買いましたか？

今となつては一世代前になつてしまいましたが、温かい目で見守ってください。

10話目どうぞ！

「第10話」ユクモ農場で特訓だぜ！

ここは・・・ユクモ農場。

ユクモ村から少し離れた場所にあり、横にはあたり1面湖が広がっている。

ハチミツ採取やキノコ採取など色々な事が出来る、最高の環境にある農場である。

そんな農場に一人の青年が、素振りをしていた。

「はあ！やあ！とお！」

ユウキだ。

ジ「後100回ニヤ！がんばるニヤ！」

横でジローも一緒に素振りしながら言った。

何故こんな事をしているかと言うと・・・

（5時間前）

ユ「すいません。いいですか村長。」

ユウキは、村長の家を訪れていた。

村「何の用？ユウキ君。」

村長はそう言った。

ユ「特訓をするために、ユクモ農場を貸していただきたいのですか。」

村「ユクモ農場を？いいけどあそこ誰も使っていないから、雑草がかなり生い茂っているからね・・・」

村長は困った表情で言った。

ユ「えっ、誰も使っていないんですか。」

ユウキは驚いた。

ゲームの中では、不自由なく使っていたのが、いざ中に入ってみると、そんな状況になっているとは分からなかったからだ。

村「どうしよう・・・そうだ！」

困った表情を通していた村長は、突然明るくなった。

ユ「えっ、どうしたんですか村長？」

ユウキが村長に聞いた。

すると村長は、こんな事を言った。

村「農場の雑草を全部片付けたら、農場ごとユウキ君に上げちゃう。」

ユ「えっ！本当ですか！???」

ユウキはかなり驚いた。

村「いいの。これはユウキ君へのご褒美。」

ユ「僕へのご褒美？」

村「うん。これで、ユウキ君の手助けになればと思って。」

ユ「村長さん・・・分かりました！このご恩、いつか返します！」

村「ふふっ、期待しているわ。」

ユウキの言葉に村長は笑った。

ユ「そうと決まれば、早速作業開始だ！ジローも連れて、ちゃっちゃと片付けて、特訓開始だ！村長、ありがとうございます！」

そう言うユウキは村長の家を出て行った。

村「せっかちなあ、ユウキ君は。」

村長以外誰も居なくなった家の中で、村長はそう呟いた。

意気揚々と、出て行ったユウキだったが、ユクモ農場の惨状を見たとき、そのキモチはすぐにさめてしまった。

ユウキ達が、「樹海かここは・・・」というほどだった。

しかし、特訓のためにハイスピードで作業をし、4時間で全ての草を除去した。

そして、今に至るのである。

〈回想終了〉

ジ「ご主人！特訓再開の時間ですニヤ！」

ユ「ん、ああ、ああ。すまない。」

ぼおーとしていたユウキは、ジローの言葉ですぐに気を取り戻し立ち上がって、特訓を開始した。

これから1カ月後に起こる出来事を知らずに・・・

T O B E c o n t i n e d . . .

「第10話」ユクモ農場で特訓だぜ！（後書き）

久しぶりの投稿でした。

次回、長編 地球編 が始まります。

ちよいぬるくなると思いますが、見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5192x/>

モンスターハンター～蒼き英雄～

2012年1月15日01時49分発行